

【国立病院機構 Q1】

乳がん(ステージ I)の患者に対する 乳房温存手術の施行率

【解説】 ※国立病院機構「H24年度 医療の質の評価・公表推進事業における臨床評価指標」(H25.10発行)より抜粋

●乳がん(ステージ I:しこりは2cm以下、リンパ節転移なし)の治療法として、再発性や整容面・QOLの視点からも、乳房温存療法が推奨されています。正確な乳癌の診断のもとに乳房温存手術を行う事が求められます。

●乳房温存療法は乳房温存手術と温存乳房への術後放射線療法からなります。乳房温存手術施行後に、手術施行病院以外で、放射線療法を受けることがあります。このため、本指標では各病院で把握可能な乳房温存手術の施行率のみを対象としています。

●なお、乳がん(ステージ I)の患者であっても、乳房温存療法の適応外となる病態や状態等があることに留意する必要があります。(下記参照)

※浸潤性乳癌(ステージ I・II)に対する乳房温存療法を適応除外すべき条件 (乳癌診療ガイドラインより)

- (1) 多発癌が異なる乳腺腺葉領域に認められる
- (2) 広範囲にわたる乳癌の進展が認められる
- (3) 温存乳房への放射線療法が行えない(活動性のSLE、強皮症など)
- (4) 腫瘍径の乳房の大きさのバランスから整容的に不良な温存乳房の形態が想定される
- (5) 患者が乳房温存療法を希望しない

【出力条件】

●DPCデータ分析ツール・girasolより出力

<分母>

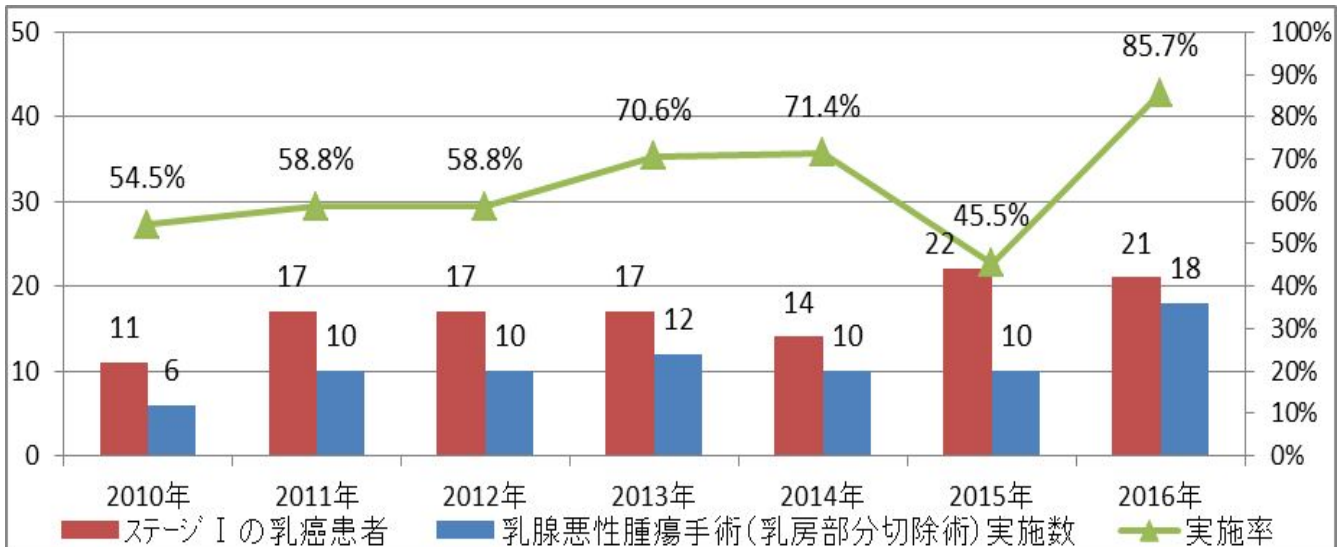
- 条件(1): 医療資源投与病名として、乳癌が選択されている症例
- 条件(2): 条件(1)のうち、ステージ I(「T1」「N0」「M0」)に該当する症例
- 条件(3): 条件(2)のうち、「乳房切除術(K475)」「乳腺悪性腫瘍手術(K476\$)」が実施されている症例

<分子>

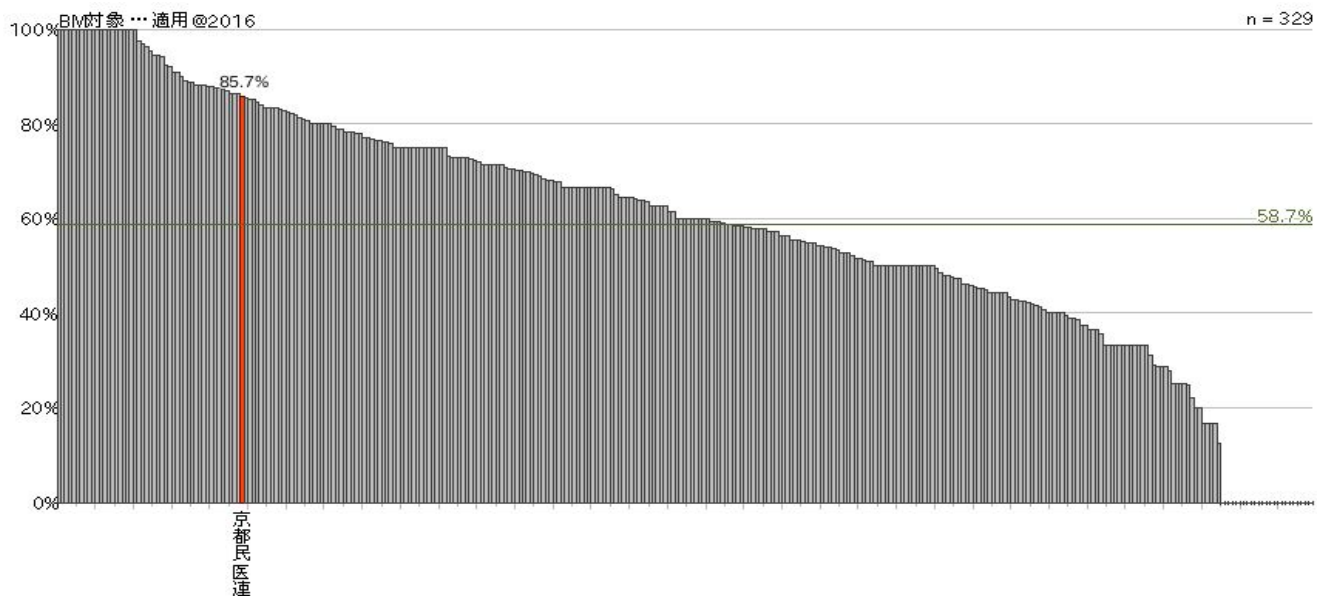
- 条件(1): 分母のうち、実施された手術が「乳腺悪性腫瘍手術 乳房部分切除術(K4762/K4764)」の症例

【結果】

＜グラフ1：当院経年比較＞



＜グラフ2：2016年間で他の医療機関との実施率比較（girasol 出力）＞



＜当院経年推移＞

- ステージ I 患者増加の一因として、マンモグラフィー機器を新しくしたこと、また検診患者が増加したことが考えられます。
- 今回この指標では、診療報酬上での「乳腺悪性腫瘍手術（乳房部分切除術）」の実施を分子対象としているため、治療上「乳房温存手術」とされている①乳房扇状部分切除術、②乳房円状部分切除術、③腫瘍摘出術のいずれかが行われていたとしても、指標上分子対象外となる場合もあります。
- 2016年に関しては、85.7%と過去7年間のうち一番実施率が高くなりました。

＜他医療機関比較＞

- DPC データ分析ツール：girasol を導入している、329 の医療機関との比較グラフです。
- 平均値は 58.7% となっており、当院は上位に位置しています。